

PMシンポジウム2007 開催のご案内

日本経済は概して好調を持続しておりますが、少子高齢化、サービス産業の生産性向上、あるいは世代間の技術やマネジメントノウハウの伝承といった、今後の我が国の競争力に影響を与える課題も少なくありません。これらの課題を解決して明日を切り拓くことが求められています。

これには種々の面でのイノベーションが必要ですが、これを推進する体系の一つとしてプロジェクトマネジメントに期待されることと果たすべき役割は何か、今回のシンポジウムはこの視点から考えます。

1. 新たな創造と成長のために（P2Mの視点）

ビジネス・事業等の経営或いは運営のレベルから、個別プロジェクトの推進のレベルまで、プログラム&プロジェクトマネジメントの観点から広く捉えます。これに伴いトラックの構成も、金融・保険並びにPMの新機軸両トラックの新設と公共の追加(エンジ・建設・公共トラックへの組み換え)を行います。

2. 組織と人の視点（PM力を鍛えるために）

これからの創造と成長のため、またこれまで積み上げて来た基盤を失わないようにするためには、組織と人の両方を強くする必要があります。PM力を失わない、伝承する、鍛える、それを“組織”とその構成要素である“人”の両面から考えます。

3. 参加型シンポジウム

CFP(公募に基づく講演)も引き続き実施します。優れた応募作が多く定着して来ました。またセミナー/ワークショップでの頭と手を動かしての能動的な関わりにもご期待下さい。



ITトラック

エンジ・建設・公共トラック

P2Mトラック

製造・サービストラック

PMの新機軸トラック

金融・保険トラック

PM人材育成トラック

PMシンポジウム2007は、各種ポイントの認定対象となります。

CPU

発給ポイントは以下の通りです。(1時間当たり2ポイントが基本となります。)

- 1日目(全時間出席の場合):10.5ポイント
- 2日目(半日講座): 5ポイント
- 2日目(1日講座):11ポイント

CPU取得証明書を発行いたします。

PDU

ENAAはPMI®認定教育プロバイダー(REP)であり、本大会は、初日シンポジウム並びに2日目のセミナー共にPMP®向けのPDU発給対象となっております。発給ポイントは以下の通りです。

- 1日目:7PDU
- 2日目(半日講座):3PDU
- 2日目(1日講座):6PDU

ご注意 PMI®へのPDU申請は必ず一括で行って下さい(初日・2日目を分割するとエラーになります)。また、PMP®資格認定試験受験用証明書も発給致します。

知識ポイント(ITコーディネータ)

ITコーディネーター資格者には、協賛(後援)により4時間当たり1ポイント相当(上限なし)の「知識ポイント」が付与されます。

各種ポイントの
認定対象となります

- CPU
- PDU
- PM教育受講証明
- 知識ポイント

PMシンポジウム 2007 基調講演

1日目 午前

基調講演1 わが国製品開発の国際競争力の根源

8月30日 10:00~ モジュラー・デザインを中心としたプログラム展開について

広島大学 大学院社会科学部研究科マネジメント専攻 教授 日野 三十四

21世紀の製造業は、日本、韓国、中国、インドなどのアジアの時代であるが、アジア各国間の激しい競争の時代でもある。台頭するアジア各国に日本が対抗する根源は、製品開発において 1)ハイテク・ハイタッチ 2)アジャイル 3)モジュラー・デザインを実現することである。

ハイテク・ハイタッチは、日本メーカーの一般的なイノベーションの原点であり、先端的なハイテク・ハイタッチ商品開発理論を紹介する。アジャイルについては、世界のトヨタ自動車が21世紀初めに開発期間を半減した方策を解説する。

モジュラー・デザインは、ますます多様化する顧客志向に少数のモジュラー部品の組み合わせで対応することによって、顧客満足、会社満足、環境満足を同時実現する21世紀型のリーンな設計方法論である。ハイテク・ハイタッチとアジャイルは、模倣、学習、ITの導入などによってアジア各国もいずれ追いついてくるが、モジュラー・デザインは製品多様化と部品少数化という二律背反を克服する方法なので、容易に模倣できない組織のコア・コンピタンスになる。モジュラー・デザインを習得する条件は、二律背反を克服する「擦り合わせ」能力が高いこと、および製品群全体を対象としたプログラムマネジメント的活動に対応能力があることであり、日本企業での実現の可能性は高い。講演者が20年近く理論的研究と自動車・重機・電気・電子製品で検証を重ねて開発した方法であり、その要点を解説する。併せて、近年、製品の品質と開発期間のボトルネックになりつつある製品組み込みソフトウェアのモジュラー化の理論的アプローチ法を提言する。



■講演者略歴 1968年、東北大学工学部卒業、同年、東洋工業(現マツダ)入社、ロータリーエンジンの研究開発に従事。1980年ごろ、経営管理・経営工学分野に傾斜、トヨタ自動車のベンチマーキングを開始。1988年、技術管理部門に依願転籍 技術標準化、モジュラー・デザイン、品質改善、製品開発システム化などを推進。2000年、マツダを退社。2002年、『トヨタ経営システムの研究-永続的成長の原理-』(ダイヤモンド社)出版・2003年 日本ナレッジ・マネジメント学会から研究奨励賞受賞・2003年 韓国と台湾で翻訳出版・2005年 米国で翻訳出版・2007年 米Shingo Prizeから2007年研究賞受賞

2003年~ 韓国の電気・電子製品会社、日本の重工業会社・電気製品会社などでモジュラー・デザインを指導。2004年~ 広島大学大学院教授に就任 製品開発論、生産管理論、経営学、経営情報論、MOT論担当。

基調講演2 ITプロジェクトの課題と方向

8月30日 11:05~ 変化する環境と実戦力のあるPM育成

富士通株式会社 常務理事 SIAシニアランス本部長 梅村 良

経営とITの一体化ということが言われている。これはITを独立してマネジメントしようとしてもダメで人間系を含むリアルワールドとITシステムを統合してマネジメントする必要があるということである。そのためにはマネジメント側からPDCAサイクルでみる見方(鳥の目)と現場に即して見る見方(虫の目)をもう一度統合しなおす必要がある。これはITシステムを使用するユーザ、提供するベンダに共通の課題であるが、富士通では「フィールドイノベーション」と呼んで取り組んでいる。

ITプロジェクトのマネジメントもこのような環境の変化に則して変わっていかねばならないが、現実にはプロジェクトの失敗は絶えることがない。これは一つには複雑化する要件定義に係わる上流工程の問題、もう一つは知識だけはあるが実戦力を伴わないPMとSEの増加が主要な原因と考えられる。要件定義はユーザ側の責任で行うべきことであるが、ベンダはそのための技法、サポートする人材を提供しなければならない。当社ではフィールドワーク手法により現場の実態の可視化、夢を売るコンサルとシステム開発をつなぐビジネスアーキテクトの育成に取り組んでいる。また、大規模プロジェクトについては社長直轄組織で徹底したリスクマネジメントを行うと共に、失敗プロジェクトの実情をリアルに語り、問題を共有し、実戦に活かす取り組みを行っている。

本講演では事例を含みこれらの取り組みを紹介することによりITプロジェクト改善への一助としたい。



■講演者略歴 1970年東京大学工学部計数工学科(数理コース)卒業。同年富士通(株)入社。以来30年にわたり、フィールドSEとして大規模プロジェクトのプロジェクトマネージャを務める。2001年PMO機能の立ち上げに従事し、問題プロジェクトの火消し等を実施。2005年SIAシニアランス本部発足に伴い、本格的に不採算プロジェクトの撲滅、SIビジネスの健全化に従事し、現在に至る。